スラヴ原住地問題について

国 本 哲 男

1. スラヴ族の統一性

西ドイツのヘルマンは1954年に次のように述べている。「中世初期のスラヴ族はきわめて多様であり、その自然環境がことなっていたため、スラヴ民族を一つの統一体と認めることができない。このことはヨセフ・ドブロフスキー〔1753—1829年〕の時から、スラヴ言語学者が正しく指摘しているとおりでである。しかし、政治史や国家史の上では、まちがった見解が生み出されている。このような統一は民族（種族）の点でも、社会関係においても存在しなかったし、政治的統一にいたっては問題にもならない。というのは、このような統一は最近に至るまで存在しなかったからである。全スラヴ族の統一を目的とするような政治的動きもなかったし、おそらく史料の中にスラヴ共同体の意識の跡を見い出すこともできないであろう」。⁽¹⁾

たしかに、スラヴ族には統一性がないように見える。ソビエトの考古学者クレインも「スラヴ族の共通性は存在するか」と設問して、次のように述べている。「古くから知られているように、スラヴ族に共通した人種型は存在しない……すべてのスラヴ族を統一し、それを他の民族から区別しているような単一の物質文化も存在しない。現在ではすべてのスラヴ族に共通する宗教も存在しない」。しかし、クレインはスラヴ族をスラヴ族たらしめているものの存在を主張して、次のように続けている。「スラヴ族をヨーロッパの諸民族から区別し、一つのグループにまとめているのは、ただ（あるいはほとんど）言葉の共通性だけである」。⁽²⁾

言語をもって民族を区別する指標にすることは、すでに古くから行なわれている。12世紀の『すぎし年月の物語』には、スラヴ族の起源と分散が次のように描かれている。[バベルの塔の破壊の物語]「これら70と2の民族（язык）のうちには、スロヴェネの民族、つまりアフエト〔ヤペテ〕の種族（племя）から出たナルツィがあり、それはスロヴェネである。長い時がたったあとで、スロヴェネはドゥナイのほとりに住んでいた。そこはいまはウゴルの国〔ハン

ガリー] とボルガルの国がある。そして、それらのスロヴェニから地上に広がり、住んでいる場所に従って、自分たちの名を呼ばれた……このように、スロヴェネの民族 (язык) は分かれた。そしてそれによって文字 (грамота) もスロヴェネの [文字] と呼ばれた」。⁽³⁾

ここでは язык (言語) が「民族」の意味で使われており、一つのスロヴェネの言語を書きしるす文字だからこそ、同じく「スロヴェネの文字」と呼ばれているのである。しかも、スラヴ族はドナウの中・下流から広がったのであり、共通の起源に基づく統一体の観念が見られる。ヘルマンは「史料の中にスラヴ共同体の意識を見い出すこともできないであろう」と述べているが、ルーシの年代記には「一つのスラヴ」の意識がみなぎっている。「スロヴェネの民族 (язык) は一つであった——スロヴェネ、彼らはドゥナイに沿って住んでいたが、ウグリが彼らを征服したのである、そしてマラヴァとチェヒとリヤヒ、およびいまはルーシと呼ばれているポリャネがそうである。」⁽⁴⁾

南スラヴ (ドナウのスラヴ)、西スラヴ (マラヴァ [モラヴィア], チェヒ [チェコ], リヤヒ [ポーランド]), 東スラヴ (ルーシ) が一つのスラヴ族であるという考えは、同じころにポーランドにおいても見られた。ポズナニの主教ボグワル (1253年歿) の年代記には、次のような伝承が載せられている。「古い本の中に書かれていることだが、パンノニア [ドナウ中流] の公パンに3人の息子が生まれた。そのうちの長男はレフ、次男はルス、三男はチェフと名づけられた。この3人の兄弟は、その氏族と民族がふえたときに、レフ [リヤヒ] とルスとチェフの三つの王国を支配し始めた……いまもそれらを支配しており、神意のあるかぎり、それらを支配していくであろう」。⁽⁵⁾ ここにもドナウ起源説が見られる。はたしてドナウはスラヴ族の原住地 (故土) といえるだろうか。

『すぎし年月の物語』の中で、スラヴ族のドナウ滞在はバベルの塔の話のあとに出ているが、それには「長い時がたったあとで、スロヴェニはドゥナイのほとりに住んでいた」となっている。ドナウに住むまでの長い間住んでいた場所については、何も書かれていない。さらにスラヴのドナウ滞在中の事件として、遊牧民の襲来があげられている。「スロヴェネの民族がドゥナイのほとりに住んでいた時に、スクフィ [スキタイ] から、つまりコザレ [ハザール] からボルガルといわれるものがやってきて、ドゥナイに沿って住み、スロヴェネに対する征服者であった。その後白いウグリがきて、スロヴェネの土地を受け継いだ。このウグリは、ペルシアの皇帝ホズドロイを攻めたイラクリー帝の時

に現われたのである。そのころオブリも現われ、イラクリー帝を攻め、すんでのところでは捕えるところであった。このオブリはスロヴェネに戦いをいどみ、スロヴェネであるドレヴィを苦しめた」。(6)

この記事には「白いウグリ」(ハザール)について混乱が見られるが、ホズドロイ(ホスロー2世, 在位598—628年)と戦ったビザンツのイラクリー帝(ヘラクレイオス, 在位610—641年)の時に、オブリ(アヴァール)がコンスタンティノポリスを攻撃(626年)している。このアヴァールは558年に初めてビザンツに使節を送り、560年にアントを攻めたあと、567年にパンノニアに侵入して定着し、アヴァール・カン国を建て、スラヴ族をはじめ、周囲の民族を服従させた。『すぎし年月の物語』のスラヴ族の分散の話には、このアヴァールに圧迫されたスラヴ族のドナウ沿岸からの移住が反映されているのである。ドナウからの移住の前の個所に、「アフエトの種族から出たナルツィがあり、それはスロヴェネである」と書かれている。ナルツィとはノリクムの住民のことであり、6～7世紀にパンノニアのさらに西の、ドナウ沿岸のノリクムにスラヴ人が住んでいたことが知られている。年代記の記事は、それを反映したものであろうが、そこが原住地で、そこからドナウを下って、中、下流へ移ったとは書かれていない。『すぎし年月の物語』からは、ドナウに住む前の長い間、スラヴ族がどこに住んでいたのかは、知ることができない。では原住地を求めするためには、どのような方法によればよいのであろうか。

2. 原住地の探求法

まず一番確実な方法は、同時代の文献資料を用いることである。6世紀半ばのスラヴ族については、ヨルダネスの『ゴート人の起源と活動について』(551年)の中に、次のような記事が見られる。「冠のように高い山でかこまれたダキアはドナウに接している……その北に傾く左斜面には、ヴィストラ〔ヴィストラ〕の源から始って、測り知れぬ広大な場所にヴェネティの種族が住んでいる。それらの名前は、いまはいろいろな氏族や土地に従って変ってはいるが、それらはおもにスクラヴェニとアンティと呼ばれている」。「スクラヴェニはノヴィエントゥムの町と、ムルシアヌスと呼ばれる湖からダナストルまで、北はヴィストラまでに住んでいる。彼らのところでは町のかわりに沼と森がある。ところでアンティは両種族の中でもっとも強く、ダナストルからダナプルまで、ポントスの海が曲っているところに広がっている。これらの川はたがい何日もの行程でへだたっている」。「ヴェネティは……一つの源から出ているが、いま

ではヴェネティ、アンティ、スクラヴェニの三つの名前で知られている」。⁽⁷⁾

ビザンツの歴史家プロコピオスも『戦記』(553年)の中で、「かつてはスクラヴェンとアンティの名前さえも同じであった。昔はこの両種族は『スポロイ』(ちらばっている者)と呼ばれていた……彼らはイステル〔ドナウ〕川の向う岸の大きな部分にわたって住んでいる」⁽⁸⁾と述べている。これらの記事から、一つの源(ヴェネティまたはスポロイ)から出たスクラヴェンとアンティが、6世紀にはドネーストル川をはさんで東西に広がっていたことがわかる。ところで、スポロイはその他の場所には出てこないのに対して、ヴェネティの方は、さらに古くさかのぼることができる。2世紀半ばのプトレマイオスは「サールマティアを占めているのは、きわめて大きな諸種族である。つまりヴェネディはヴェネディ湾〔バルト海〕の全体に沿って住んでいる」⁽⁹⁾と述べている。

さらにさかのぼると、タキトゥス(55—117年)がその『ゲルマニア』第46章の中に、次のような記事を残している。「スエービアはここに終る。ペウキーニー、ウェネディー、フェンニーの諸族は、ともにサールマティア族に加うべきか、はたゲルマニア族にかぞえいれるべきかに、わたくしは迷っている……ウェネディーはかかる〔サールマティア族の〕習俗の多くを取り入れた。彼らはペウキーニーとフェンニーとの間、山や森のそびえるところはいずこを問わず、〔山〕賊を働きまわっているが故である」。⁽¹⁰⁾ また、大プリニウス(23/24—79年)は『博物誌』の中で、「ある著述家たちは、これらの地方〔サールマティア〕がヴィストゥラ川に至るまで、サルマタイ、ヴェネディ、スキタイ、ギルによって占められていると伝えている」⁽¹¹⁾と述べている。

このような記事から、紀元前後にはヴェネディー族がヴィスラ川の東、ペウキーニー(カルパト山脈の北部に住む)とフェンニー(フィンランドに住む)との間で、バルト海に至る地方に住んでいたことがわかる。しかし、これはあまりにも漠然とした記事であり、しかも、このヴェネディーはスクラヴェンとアンティ、ヴェネディの先祖としてのスラヴ族だけを指しているのか、あるいは他の民族(例えばスラヴ族に近いバルト族)をも含んでいたのかが、はっきりしない。これらの記事を他の史料で補ってスラヴ原住地をつきとめることは、いまのところ不可能である。もっとも確実性のある文献資料が頼りにならないとすれば、不確実ではあっても他の資料を使って、おおよその地域をさぐらざるをえなくなる。

まず考えられるのは、考古学と言語学の資料である。考古学では確実に民族的所属のわかっている考古学的文化をさかのぼらせて、さらに古い時代の似た

ような文化の担い手が同じ民族であると推定し、それを繰り返していく。これを遡及法というが、このような方法では物質文化の時代と地域を定めることはできても、その担い手を確定することができない。同一民族であっても文化を変えることがあり、また同一文化であっても、その担い手の民族的所属が異なることがあるからである。多くの考古学者はこの方法を守っているが、先にあげたクレインは、遡及法にはなほだ懐疑的であり、次のように述べている。

「つまづくことなしに、考古学は遠くまで進むことができるであろうか……ほとんど一歩ごとに分れ道で立ちどまり、そのどちらを選ぶべきかに迷わなければならない。16年前に私はこの方法を『めくらめっぽうの、あてずっぽうの運動』と名づけた」。¹²⁾

しかし、現在遡及法によって、インド・ヨーロッパ語族の原住地が、ボルガ下流を中心として東西にひろがるステップ地帯に求められている。紀元前3千年期の竪穴墳文化（クルガン文化）がそうであるとされており、このことはソビエトばかりでなく、世界的にすでに認められている。¹³⁾ さらに紀元前3千年紀末～2千年期初にかけて、西はラインから北は、ユトランドとスカンジナビア南部、バルト海の南岸と東岸、南はドネプル中流から東はヴォルガ上流、中流にまで達した縄文土器と鬮斧を特徴とする牧畜・農業民族が、インド・ヨーロッパ族に属することも、だいたい承認されている。それはゲルマン族、バルト族、スラヴ族の共通の先祖と考えられている。¹⁴⁾ この地域のうち、ヴォルガ沿岸とバルト海東岸地方へはいったインド・ヨーロッパ族は、土着のフィン・ウゴル族によって同化されたので、それを除く地域の中に、スラヴ族の原住地が存在することになる。

すでに1934年にビスクーピンの杭上集落を発掘したポーランドのコスツシェーフスキーは、紀元前13～4世紀にバルト海、エルベ川、カルパト、西ブグ川にかこまれる地域にひろまっていたラウジツ文化を、スラヴ族のものと主張している。ラウジツ＝スラヴ説を支持し、ここをスラヴ原住地とする者はかなり多いが、しかし、モーンガイトは「ラウジツ文化族を文献資料に知られる後代の民族と結びつける説は、どれ一つとしてまだ十分論証されていない」¹⁵⁾と指摘している。

遡及法はさらにさかのぼっていく。ラウジツ文化が西から東へ進んだことを否定するトレチャコフは、もう一つ古い時代（紀元前15～12世紀、一部は8～7世紀まで続く）にオーデルからドネプル中流にかけてひろまっていたトシネツ・コマローヴォ文化について、次のように述べている。「トシネツ族は、

他の資料から古代スラヴ族の地域と考えられる土地に住んでいたことになる。このことから、まさにトシネツ族こそ、最古のスラヴ人、あるいはそのもっとも重要な構成要素と考えられる」。⁽⁶⁶⁾

このように古くまでさかのぼることが可能であろうか。遡及法に従いながらも、慎重な考古学者は、もっと手前で立ちどまっている。この点についてアルタモーノフは、次のように指摘している。「文化の発展段階の継承関係の点から東スラヴ族の歴史に取り組むにあたって、われわれはスラヴの民族起源についていかなる恣意をも認めず、事実、ただ事実だけを積み重ね、綿密に研究しなければならない。そのさいどのよう確実にそうに見えようとも、事実を推測で置きかえるようなことがあってはならない。このような点からふりかえってみると、これまで考古学で定説と思われていた説が、明らかな誤りではないにしても、再検討し、さらに資料を加えて検証しなければならない仮説にすぎないことがわかってきた」。⁽⁶⁷⁾

現在ソビエトの歴史学や考古学では、「全体としてのスラヴ族、とくに東スラヴ族の最古の歴史は、きわめてさまざまな調子で描かれている。新しい本や論文の著者は、この歴史をそれぞれ自分なりに描いており、しかも、同じ研究者の見解がたがいに矛盾していることもめずらしくない」。⁽⁶⁸⁾ 東スラヴ考古学の専門家であるリャープシキンはこのように述べているが、彼自身は、6世紀以前のスラヴ族の居住地はわからないと主張している。6世紀といえば、ヨルダネスやプロコピオスにスクラヴェンとアントの記述が出てくる時代であるが、考古学上ではこの時代のスラヴの文化は、プラハ式（コルチャク式）土器文化と呼ばれている。

プラハ式土器とは、6～8世紀にかけて、西はチェコから東はドネーブル中流まで、北はヴィスラ上流、プリピャチの線から、南はドナウに至る広い地域にひろまった、手こねの粗朴な土器である。それは川に近い開放集落の2.5×3.5～4×4 m (10～16 m²) の四角な半竪穴住居（石または粘土のかまどか炉をともなう）や、火葬墓地から発見されている。⁽⁶⁹⁾ リャープシキンはこれを「確実なスラヴの遺物」として認めた上で、遡及法について次のように述べている。「紀元1～2世紀のヴェネドの考古学的文化を決定する問題については、いまのところ、なんら確実なことを述べることができない……ヴェネドの位置の問題は、歴史学の根本的な問題として残っている。この問題の解決は、われわれの考えによれば、考古学的資料によってのみ可能であり、その探求を続けなければならない。この研究においてもっとも合理的なのは、確実なスラヴ遺物か

ら出発することである。東ヨーロッパの、われわれに知られているスラヴの物質文化——コルチャク式土器——が、突然に、空地に、無から生じたとはとうてい考えられない。その根があるにちがいない、それが発見されるであろうと信じている」。²⁰

これはきわめて慎重な立場ではあるが、考古学的資料による遡及法だけで、はたしていつの日かスラヴ原住地をつきとめることが可能であろうか。それに、紀元前2千年紀の縄文式土器文化と6世紀のスラヴをつなぐ道は、他の方法では見つからないのであろうか。この点を言語学その他の研究成果から検討していくことにしよう。

3. 言語学的探求法

すでに述べたように、考古学者のクレインは、スラヴ族の共通性を言語の共通性に求めているが、先にあげた言葉を、次のように続けている。「スラヴ族の起源の問題は、根本的にはスラヴ族の言語の共通性の起源の問題になる。従って……言語の親近性はどこから生じたのか——このように問題を提起して始めて、現実的な、具体的な意味を持つようになる。つまり、スラヴ族の起源の問題は、だいたい言語の問題であり、なによりも言語学の方法で解決しなければならない」。²¹

しかし、これに反対する言語学者もいる。ポーランドのルール・スプラヴィーンスキーがそうである。彼は次のように主張する。「言語の共通性を確認しても、それは民族問題の解決にはならない。言語は実際に、それぞれの社会の民族的独自性の重要な要素ではあるが、しかし単一のものではなく、また決定的なものでもない。言語のほかに、物質的および文化・歴史的 성격の他の重要な要素が社会の要素に加わっており、しかも、社会の形成と発展は、言語よりもその他の要素によるところが大きい」。²² 彼はバルト・スラヴ語からスラヴ語が成立する過程について述べている。「縄文土器文化、のちにはラウジツ文化の分布過程と、バルト・スラヴ共通基語の発生と崩壊の過程との間に存在する併行関係は、きわめて明らかであると思われるので、スラヴ族とバルト族の起源の問題にとって重大な意味を持つおおよその年代を決定するにあたって、十分な根拠をもって上のことを利用することができる。この点で言語学は無力であるので、考古学が役立つのである」。²³

ルール・スプラヴィーンスキーは、考古学を言語学にあてはめることによって、民族起源の時代ばかりでなく、その地域をも指定する。それは次のように

展開される。「縄文土器の担い手は、〔紀元前千年紀の初めに〕オーデルから東北に、ほとんどオカの流域にまで広がっており、そこにはそれまでいわゆる櫛目文土器文化の担い手（ウラル山麓から現われる）が住んでいた。縄文土器文化人はごくわずかな文化要素を借用しただけで、比較的早く櫛目文土器文化を同化したので、これらの文化が、インド・ヨーロッパ縄文土器文化を土台にして混合したものを、バルト・スラヴ共通基語の考古学的文化と考えるのが、いちばん正しいと思われる……さらに、バルト・スラヴ共通基語が崩壊し、その場所に独立したスラヴ語族とバルト語族が発生したことも、考古学にそれに対応するように反映されている」。²⁴

「私はスラヴ族の発生を、古くからの原バルト（バルト・スラヴ）複合体の西のより小さな地域が、東から切り離された結果であると考えている。この分離が行なわれたのは、南・中部ヨーロッパから、やがていわゆるラウジツ文化となっていく民族・文化複合体が〔紀元前2千年紀半ばに〕侵入してきた結果である。この侵入はオーデル、〔西〕ブグを含むヴィスラ、ドネプル上流の流域に及び、いくつかの新しい、つまり南インド・ヨーロッパ的言語要素を持ちこんだ。それは古くからの基盤としてのバルト祖語に完全に同化されて、この土地に新しい言語複合体を形成せしめた。この複合体は、最初の原バルト地帯と結びつく基本的特徴を保ちながら、スラヴ共通基語として、独立した発展の道を進み始めた。その発祥地は西のオーデルと、ヴィスラの流域、この両河の間にあり、バルト海の岸にまで達していた」。²⁵

レール・スプラヴィンスキーは以上のことから、時代の計算を行なっている。「いま問題にしている地域に、紀元前2千年紀の初めに縄文土器文化が普及し、ウラル文化（櫛目文土器文化）を同化したことが、同時にこの地域をインド・ヨーロッパ語化し、バルト・スラヴ共通基語が発生した出発点として考えられる。紀元前2千年紀のほぼ半ばにこの地域の西部を東部から切り離したラウジツ文化の膨張は、共通時代の終着点となり、同時にスラヴ語とバルト語の独立した発展の出発点となっている。このように、バルト・スラヴ共通基語の存在期間は500～600年になる」。²⁶

いままで見てきたところでは、スラヴ原住地については、次のように見解が分かれている。

- 1) 現在の考古学の段階では、6世紀より古くスラヴ族の源流をさかのぼることができず、原住地は不明（リャープシキン）。
- 2) 紀元前15～12世紀のトシネツ・コマローヴォ文化の分布地であるオーデ

ルとドネーブル中流の間（トレチャコーフ）。

3) 紀元前13～4世紀のラウジツ文化の分布地であるエルベとヴィスラの間（コスツェーフスキー）。

4) 紀元前2千年紀の半ばにラウジツ文化が進出した、バルト・スラヴ複合体の西の部分であるオーデルとヴィスラの間（レール・スプラヴィーンスキー）。

これらはいずれも考古学的方法によるものであるが、遺物の解釈の相違から、このように時代と地域がくいちがってきているのである。

ソビエトの言語学者フィーリンは、このような考古学を重視する方法に批判的である。それはクレイインと同じように、「もし、スラヴ共通基語が話されていた時期と場所がきまれば、スラヴ族の起源問題がだいたい解決されたことになる。言語とは、古代の民族的共通性を示す、不変の、まちがいのない指標である。したがって、民族起源問題を解決する鍵は、言語の研究にある」¹⁷⁷ という立場に立っているからである。

しかし、フィーリンはその他の資料を無視しているわけではなく、また、言語学による探求の結果を、絶対に確実なものとして主張しているわけでもない。考古学的資料のもつ地域と年代決定の利点について、「考古学的文化を復元された言語学的地域に『あわせる』ことが必要であり、その逆に『あわせ』れば、どのような結果も期待できないであろう。というのは、現代の考古学は古代住民の物質文化の歴史を再建するが、その民族的歴史を再建しないからである」¹⁷⁸ と述べている。レール・スプラヴィーンスキーの方法は、まさに言語学を考古学に「あわせて」いるのである。考古学的方法が補助的手段であるとして、言語学的方法はどうであろうか。

言語考古学ともいわれるこの方法は、インド・ヨーロッパ語族の原住地を探求するうえで、すでにある程度の効果をあげている。それは、次のようなやり方で、原住地を割り出していくのである。

- 1) その民族のはっきりした移住地を除く。
- 2) 共通基語を再建し、その語彙から原住地の自然環境を復元する。これには語彙に含まれる語からその範囲を推定するとともに、語彙に欠けている語から、その自然環境を除く。
- 3) 共通基語内の他民族からの借用語、およびその共通基語の他民族における借用から、接触した民族の種類と時代を推定し、原住地の相対的位置をきめる。

- 4) 地名，とくに河川名から民族の古い居住地を推定する。
- 5) 以上のような方法によって得られた原住地と，考古学的文化との対応を求める。

このような方法で得られた結果には，いろいろな制約がともなう。まず原住地の範囲が相対的で，漠然としている。年代についていえば，復元された共通基語が，民族が分裂する直前の状態しか示さないため，それ以前の古い時代がわからない。フィーリンも「将来研究者によって，まったくちがった結論を生み出すような，新しい，もっと正確な証明が現れることが十分考えられる。しかし，現在のところ，多少なりとも確定的な解答が存在しない以上，ある程度の解答にがまんせざるを得ない」と述べて，言語学を主体とする方法の限界に触れている。

このような方法をスラヴ原住地問題にあてはめて，さまざまな資料を総合したものとしては，チェコスロヴァキアのニーデルレ（1865～1944年）の研究がすでに有名である。彼の説では，紀元前後のスラヴ族は，西はヴィスラ（ただし，ラウジツ文化がスラヴ族のものであればエルベ），東はドネープル中流，デスナ，デスナに接近するドン，北はプルシアとマゾヴィア，ナレフとプリーパチの湖沼地帯，南はドナウとカルパトにかこまれた地域に住んでいたことになる。⁸⁹⁾ この説が正しいかどうかを，その後の研究成果を取りいれてまとめたフィーリンの説に従って，紹介することにしよう。

なお，スラヴ原住地をネマン・西ドヴィナの下流とバルト海にはさまれた沿海地方に求めていたシャーフマトフ（1864～1920年）も，晩年には次のように述べている。「東ゲルマン（ゴート）族は，かつてヴィスラ沿岸を占めていた。しかし，彼らが2世紀に南へ動いたことが，ヴィスラ沿岸をスラヴ族に明け渡すことになった。スラヴ族がどこからヴィスラ沿岸へ現れたのかという問題は，まだ解決されていない」。⁹⁰⁾

4. 言語学的方法によるスラヴ原住地

1. **スラヴ族の移住地** 6世紀にスラヴ族がドナウ沿岸に現れるまでは，この地方にはダキア族やトラキア族が居住していたので，ドナウ沿岸を除く。そのほか「バルト海沿岸地方，ドネープル流域北部，中部ロシア，ヨーロッパ・ロシア南部は，現代の科学の資料からすれば，古代スラヴ族の居住地域から除かれる（少くとも紀元前1千年紀後半と紀元初めには）」。⁹¹⁾

2. **共通基語による自然環境** スラヴ族は紀元後にはかなり広い地域に分

散しているのので、再建された共通基語からは、紀元前1千年紀後半の状態しかわからないが、自然環境を現わす語彙には、次のようなものがある（フィーリン, pp. 111—123）。

1) 植物

(1) 総称——*lěsъ (闊葉樹林, 森), *borъ (針葉樹林), *dervo (木), *listъ (葉), *větъvъ (枝), *květъ (花), *(s)kora (樹皮), *sokъ (枝, 節), *rъnъ (株), *korenъ (根), *trava (草), *bylъ (草の茎), *(j)agoda (漿果)。

(2) 野生の木——дуб (カシ), липа (ボダイジュ), клён (カエデ), ясень (トネリコ), берёза (シラカバ), осина (ハコヤナギ), рябина (ナナカマド), верба (ネコヤナギ), ива (ヤナギ), ольха (ハンノキ), ветла (シロヤナギ), малина (エゾイチゴ), черёмуха (エゾノワミズザクラ), ель (エゾマツ), сосна (マツ)

「スラヴ共通基語の担い手は森をよく知っていたが、それは温帯の混合樹林である。ステップ固有の植物や動物、景観を現す語が共通基語に欠けていることが、注目される」(p. 112)。

野生の木の中でも、その名称が借用語である場合には、その木の生えていなかった地域にスラヴ族が住んでいたことになる。この点については、1908年にポーランドのロスタフィーンスキーがすでに指摘しており、モシーニスキーがさらに詳しく検討して次のように結論している。「原スラヴ語の地域は、西方の木である бук (ブナ), пихта (モミ), явор (シロカエデ), лиственница (カラマツ), тис (イチイ), brzekina (ポーランド語, ナナカマドの一種), черешня (西洋ザクラ) の生えている地域の外にあった」(p. 146)。このうち、ブナ (*bukъ) は、「ブナ論争」としてインド・ヨーロッパ語族の原住地問題でも取り上げられているが、この木はカリニングラート (ケーニヒスベルク) からオデーサを結ぶ線の西に生えているので、スラヴの原住地は西ブグ川より東ということになる。もっとも、現代の植物分布圏が必ずしも古代のそれと一致するとは限らないと主張する者もあるが、それに対してフィーリンは、「ドイツの森のもっとも普通の木はブナであり、それは青銅器時代の終り、ほぼ紀元前 800 年ごろに、中部ヨーロッパにおいてもっともひろがっていた」とするヴリフの説を引用して、「ブナの東限はここ 2000 年なし 2500 年、あるいはそれ以上の間、根本的には変っていない」¹²⁾と反論している。スラヴ語の *bukъ は、ゲルマン語の *bōkō からの借用とされている。

シロカエデ (*javorъ) は、古高地ドイツ語の āhorn の借用語で、「モシーニスキーの考えているように、5世紀末か6世紀に、スラヴ族が高地ドイツ族とチェコスロヴァキア・東オーストリア・スロヴェニアの線で強く接触していた時代に、どこかで借用されたと思われる」(p. 145)。この木は現在スラヴ族の居住している地域の西と南の地方に生えている。

カラマツ (ロシア語 *лиственница*) の名称は現代の各スラヴ語で異っており、この木はカルパト山地、モラヴィアの西南部におもに生えている。ポーランド語の *modrzew* はゲルマン語からの借用とされている。

次にエゾマツ (*jedla, *jedľ) であるが、この木はドネープル中流から西にかけて広く広がっている。これに対してモミはヴィスラ、オーデル、ドネーストル流域には生えているが、東の方には生えていない。ところが西スラヴ語ではモミを *jedla* (チェコ語), *jodla* (ポーランド語) と呼び、エゾマツには他の語が使われている (チェコ語 *smrk*, ポーランド語 *świerk*)。ロシア語ではモミは *пихта* (フィン語か、ゲルマン語からの借用) である。このことはスラヴ族がモミの生えているところへ進出してから、それに共通基語の *jedla, jedľ を移したものと考えられる。原住地にはエゾマツは生えていても、モミは生えていなかったのであろう。

- (3) 栽培植物——*proso (キビ), *ječmy (オオムギ), *žito (穀物, ライムギ, オオムギ), *ovъsъ (カラスムギ), *pъšeno (砕いたキビ), *pъšenica (コムギ), *rъžь (ライムギ), *bobъ (ダイズ), *sočevica (レンズマメ), *gorch (エンドウマメ), *makъ (ケシ), *kapusta (キャベツ), *lukъ (ネギ), *pěpa (カブ), *redьky (ダイコン), *mъrky (ニンジン), *lьnъ (アマ), *konopja (アサ), *kolsъ (穂), *zьrno (雑穀)

マヴロージンはスラヴ諸語に保たれている古い月の名称から、農業暦を復元している。それによれば、1月は *сечень* (木を切る), 2月は *сухой* (木が枯れる), 3月は *березозол* (シラカバを焼いて灰にする), 4月は *кветень* (花が咲く), 6月は *червень* (赤い花が咲く), 7月は *липень* (ボダイジュの花が咲き、蜜蜂が活躍する), 8月は *серпень* (鎌で刈る) または *жнивень* (取りいれる), 9月は *вресень* (打穀する), 10月は *жовтень* (葉が金色になる), 11月は *листопад* (葉が落ちる), 12月は *грудень* (土が塊りになる) または *снежань* (雪が降る) である。この月の名から、マヴロージンは次のように結論する。「古代スラヴの農耕は焼畑農法であり、ステップではなく、

森林地帯と森林ステップ地帯で起ったことを示している……それは遠い北の針葉樹の密林ではなく、また南のステップでもなく、混合樹林と闊葉樹林の地域であり、東ヨーロッパと中部ヨーロッパの中央地帯にあたっている」。⁸³⁾

2) 動物

- (1) 野獣——*lisъ, *lisa (キツネ), *zajęć (ウサギ), *losъ (オオシカ), *medvěď (クマ), *krъť (モグラ), *kuna, *kunica (テン), *dъchorъ (クサネコ), *laska, *vylaska (イタチ), *gornostaj, *gornostal (テン), *jazvъcъ (アナグマ)
- (2) 家畜——*pisъ (イヌ), *konъ, *komoń (ウマ), *kobyła (メウマ), *bykъ (オウシ), *volъ (去勢ウシ), *borvъ (小家畜, 去勢イノシシ), korva (メウシ)
- (3) 鳥——*kurъ, *kura (ニワトリ), *gъcъ (ガチョウ), *qty (カモ), *elbęď, *labęď, *labęď (ハクチヨウ), *golqбъ, *golqбъ (ハト), *vorбъjъ (スズメ), *vornъ (オオガラス), *vorna (カラス), *solvъjъ (ウグイス), *skvorъcъ (ムクドリ), *sinica (シジュウガラ), dętelъ (キツツキ), *lasta, *lastovica (ツバメ)
- (4) 魚——*somъ (ナマズ), *okunъ (スズキ), *jazъ (コイの一種), *korpъ (コイ), *karasъ (フナ), *plotisa (コイの一種), *piskarъ (カマツカ, カマス), *linъ (コイの一種), *jelbcъ (ウグイの一種), *ukleja (コイの一種), *qgorъ (ウナギ), *lososъ (サケ)

3) 景観

*jezero, *jezerъ (湖), *pleso (川の淵), *pręď (急流, 浅瀬), *bolto (沼), *bagnо (沼, むかるみ), *loky (沼), *lomъ (沼), *luža (水たまり, 沼), *borъ (針葉樹林), *lęcъ (闊葉樹林), *lęgъ (木の生えた低地), *bolń (低地, 草地, 川沿いの地), *dъbrъ (谷, 木の生えた凹地), *drezgъ (森), *gajъ (闊葉樹林, しげみ), *dqbrъ (森), *pole (森の中の開けた野)

以上のような語彙には、海、山、ステップに関係するものが欠けている。
*gora は「木におおわた」岡, 高地のことであり, *more は内陸の湖や沼であつたらしい。「スラヴ共通基語の語彙に、湖、沼、森のいろいろな様子を示す語の多いことは、それだけで一つのことを物語っている。森や沼にすむ動物や鳥、穏和な森林地帯の木や植物、この地帯の水域に典型的な魚の名が存在し、それと共に山、ステップ、海の特徴を示す語が存在しない……スラヴ原住地は、

少なくとも単一の民族体としての歴史の最後の段階には、海、山、ステップから離れたところ、温帯の湖と沼の多い森林地帯にあった……このような場所は西ではエルベ、オーデルの中流から、東ではデスナにまで達する」(p. 122)。これではあまりにも漠然としているので、さらに範囲をせばめるために、隣接民族との関係を検討しなければならない。なおポレーシエ（プリーピャチ流域）の方言調査に基いて、トルストーイは次のように述べている。

「ポレーシエの地理的用語は、語彙素の数ばかりでなく（後期の借用は全体として少ない）、言葉の意味の点からも、スラヴ共通基語に近い。それはおそらくポレーシエの景観がスラヴ居住地の地理的特徴に近いことと、ポレーシエの方言のかなりの古風さによるものと考えられる」。⁶⁴⁾

3. 隣接民族との関係 スラヴ族と隣接民族との等語線や借用関係を見てゆくと、紀元前1千年紀後半の状態として、次のことがわかる。

1) スラヴ語とバルト語には共通の語が多く、ゲルマン語とバルト語との間にも多い。これに対して、スラヴ語とゲルマン語の間には、インド・ヨーロッパ共通基語の方言にさかのぼるものを除いて少ない。従って、紀元前1千年紀後半には、スラヴ族とバルト族、ゲルマン族とバルト族は接触していたが、スラヴ族とゲルマン族は離れていた。

2) バルト語とフィン・ウゴル語には借用関係があるが、スラヴ語とフィン・ウゴル語の間にはない。従って、スラヴ族とフィン・ウゴル族の間にはバルト族がはいりこんでいた。

3) スラヴ語とイラン語の借用関係は、バルト語とイラン語のそれよりはるかに大きい。従って、スラヴ族とイラン族は強く接していたが、バルト族とイラン族の接触は弱い。

このようなことからフィーリンは、次のように結論している。「古代スラヴ族は、バルト族と北イラン族の間を占めており、ゲルマン族からはなんらかの民族、おそらくはイリリア族によって、さえぎられていた。もし、スラヴ居住地がヴィスラ・オーデルにあったとすれば、スラヴ族とインド族の間に直接の言語的関連のあったこと、このような関連がスラヴ族とイラン族の間にはなかったこと、バルト族とゲルマン族の間には数世紀にわたる著しい接触があり、バルト族とイラン族の関係が、スラヴ・イランのそれより弱いことが説明できない」、「紀元前1千年紀後半には、スラヴ族はドネープル中流と西ブグの間の土地〔ポレーシエ、ヴォルィニ〕を占めていた」。⁶⁵⁾

4. 地名（川の名） ドネープル川上流の川の名を調査したトポロフと

トルバチョーフは、バルト語の川の名がプリーピャチより南にあることと、バルト語とイラン語の要素が隣り合っていることを明らかにした（1962年）。それを高く評価したヴィスラ・オーデル説のレール・スプラヴィーンスキーは、「スラヴ原住地がドネープルあるいはヴォルィニにありうるという説に対して、根本的に終止符を打つものである」⁶⁶⁾と断言している。

ところで、その後トルバチョーフはドネープル右岸の川の名を調査して、プリーピャチ以南のスラヴ語の川の名について、次のように述べている。「構成の不規則性、造語力のない性格、あるいは東スラヴ語の語彙に結びつかないような古いスラヴ語名の大きなグループが、ドネープル中流の部分、おもにプリーピャチ右岸流域の中心部を占めている……プリーピャチ右岸が土着のスラヴ族の基地であるように思われる」⁶⁷⁾ さらにトルバチョーフは、プリーピャチ以南のバルト語の川の名について、「プリーピャチ南部にだけ、古いスラヴ名も、バルト名も、多くのイリリア名も確実に存在しているため、年代を決めるのがきわめて困難であり、しかもここには語源が二通り考えられるものが見られる」⁶⁸⁾と指摘したうえで、レール・スプラヴィーンスキーの断言に対して、「この問題に対する最終的な答を出す時がまだ来ていないように思われる」⁶⁹⁾と述べて、早急な結論を出すことをいませめている。

5. 考古学的文化との対応 考古学的文化を、言語学的方法による結果に「あわせる」ことを主張しているフィーリンは、このことについて、次のように述べている。「われわれの考えでは、比較史的言語学がドネープル中流地方がスラヴ原住地であることを証明している以上、ザルビンツィ文化（紀元前2世紀～紀元2世紀末、北部では4～5世紀まで）をスラヴ文化と認めるべきであろう」⁴⁰⁾

ザルビンツィ文化について詳しく述べる余裕はないが、考古学者の間ではこの文化をスラヴ文化とする者（トレチャコーフ）、西バルト文化とする者（セドーフ）、所属不明とする者（リャープシキン）などがあり、意見の一致が見られない。

む す び

フィーリンも「ドネープル中流・西ブグ（ポレーシエ・ヴォルィニ）説」を絶対に確実なものと主張しているわけではない。「間接的な証拠に基づいて建てられたスラヴ原住地にかんするわれわれの推定は、多少なりとも正当性のある研究上の仮説であるにすぎない。われわれの見解からすれば、もっとも確か

らしく思われるのは、ドネープル中流・西ブグ・スラヴ原住地説である」。⁽⁴⁾

しかし、この証明法と仮説は、現在ソビエトの歴史学者によって支持されている。マヴロージンは大学用のテキストの中で、次のように書いている。「文化や人種型ではなく、言語こそ民族の統一性のもっとも重要な、決定的な指標である」。⁽⁴⁾「もっとも古い資料の残っている時代のスラヴの移住地域は、ポレーシエ北から南へプリーピャチからドネーストル上流と森林ステップ地帯にまで広がる、西ブグとドネーストル〔ドネープルか?〕にはさまれた地域である」。⁽⁴⁾

以上のことから、紀元前1千年紀後半にはドネープル中流・西ブグ間にスラヴ族が居住していたと認めて、差しつかえないであろう。しかし、紀元初期にこのスラヴ族がヴィスラを越え、オーデル、バルト海に達したのであるだろうか、あるいは紀元前1千年紀前半のオーデル・ヴィスラのスラヴ族が、その後東へ進んでポレーシエに住みついたのであるだろうか。この問題についてはポーランドの言語学や考古学の成果を検討しなければならない。

注(1) В. Т. Пашуто. Реваншисты-псевдоисторики России. 1971, стр. 41—42.

(2) Л. С. Клейн. К постановке, вопроса о происхождении славян. В кн. «Проблемы отечественной и всеобщей истории». 1969, стр. 26.

(3) Повесть временных лет, ч. 1, 1950, стр. 11.

(4) 同上, 21ページ。

(5) Monumenta Poloniae Historica, t. II. 1864—1878, p. 468—469. (В. Т. Пашуто. Внешняя политика древней Руси. 1968, стр. 31.)

(6) ПВЛ., ч 1. 1950, стр. 14.

(7) Иордан. О происхождении и деяниях гетов (Хрестоматия по истории средних веков, т. 1. 1953, стр. 14—15.)

(8) Прокопий из Кесарии. «Война с готами.» (Хрестоматия..... стр. 21.).

(9) Птолемей. География (Хрестоматия..... стр. 14.).

(10) タキトゥス『ゲルマニア』(田中秀央, 泉井久之助訳, 岩波文庫, 158—159ページ)。

(11) Плиний старший. Естественная история, кн. IV, 97 (Хрестоматия....., стр. 14.).

(12) Л. С. Клейн. К постановке..... стр. 28, 30.

(13) История СССР, т. 1. 1966, стр. 98—104, 155—158. 吉田敦彦『印欧語族研究の最近の動向』(『みすず』1670.)。

(14) П. Н. Третьяков. Финно-угры, балты и славяне на Днепре и Волге. 1966, стр. 69—72.

(15) Советская историческая энциклопедия, т. 8. 1965, стр. 803.

(16) П. Н. Третьяков. У истоков древне-русской народности. 1970, стр. 24.

- (17) М. И. Артамонов. Вопросы расселения восточных славян и советская археология. В кн. «Проблемы всеобщей истории». 1967, стр. 32.
- (18) И. И. Ляпушкин. Славяне восточной Европы накануне образования древнерусского государства. 1968, стр. 5.
- (19) В. В. Седов. Славяне верхнего поднепровья и подвинья. 1970, стр. 63—76.
- (20) И. И. Ляпушкин. Славяне..... стр. 8.
- (21) Л. С. Клейн. К постановке..... стр. 27.
- (22) Т. Лер-Сплавинский. Материалы к IV международному съезду славистов (Вопросы языкознания. 1958, №. 1, стр. 39.).
- (23) 同上, 40ページ。
- (24) 同上。
- (25) Т. Лер-Сплавинский. О северно-восточных окраинах праславянского языка, По поводу книги В. Н. Топорова и О. Н. Трубачева о гидронимике верхнего Поднепровья. (Вопросы языкознания. 1964, №. 1, стр. 136.).
- (26) Т. Лер-Сплавинский. «Материалы.....», стр. 40.
- (27) Ф. П. Филин. Некоторые проблемы славянского этно- и глоттогенеза. Вопросы языкознания. 1967, №. 3, стр. 39.).
- (28) 同上, 40ページ。
- (29) Ф. П. Филин. Образование языка восточных славян. 1962, стр. 32—33.
以下本文中にページを示す。
- (30) А. А. Шахматов. Древнейшие судьбы русского племени. 1919, стр. 12—13.
- (31) Ф. П. Филин. Некоторые..... стр. 32.
- (32) 同上, 36ページ。
- (33) В. В. Мавродин. Образование древнерусского государства. 1945, стр. 14—15.
- (34) Н. И. Толстой. Славянская географическая терминология. 1969, стр. 243.
- (35) Ф. П. Филин. Некоторые..... стр. 34.
- (36) Т. Лер-Сплавинский. О северно-восточных..... стр. 136.
- (37) О. Н. Трубачев. Названия рек правобережной Украины. 1968, стр. 270, 272.
- (38) 同上, 284ページ。
- (39) 同上, 10ページ。
- (40) Ф. П. Филин. Некоторые.....стр. 40.
- (41) 同上, 41ページ。
- (42) В. В. Мавродин. Образование древнерусского государства и формирование древнерусской народности. 1971, стр. 5.
- (43) 同上, 8ページ。